The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本が戦争に巻き込まれないようにするために政府がとるべき行動
Author(s)	塚原, 陽
Citation	平成28年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2017
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60350
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

申請先学部　法学部
採択番号　　No.2

平成２８年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	つかはら　ひかる 塚原　陽	学部 学科	法学部 法学科	学年	１年
ふりがな 共　同 研究者名		学部 学科		学年	年
					年
アドバイザー教員 氏名	上川龍之進	所属	法学研究科		
研究課題名	日本が戦争に巻き込まれないようにするために政府がとるべき行動				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。				

近年、日本を取り巻く国際情勢は大きく変化した。とりわけ、北朝鮮の核の脅威や、韓国・中国との対立（特に領土問題）、そしてアメリカが持っていた圧倒的な覇権の衰退などが顕著である。この情勢の中、第２次・第３次安倍晋三内閣は、集団的自衛権の行使を部分的に容認する憲法解釈変更の閣議決定や、安保関連法の制定など、様々な安全保障政策を行った。これに対しては、賛成、反対の立場から様々な意見が主張され、現在も議論が活発であるように思われる。しかし、ここでこれまでの戦争を振り返り、戦争（特に第１次、第２次世界大戦などの絶対戦争、総力戦）がなぜ起こってしまったのか、そしてどのように戦争を回避、防止し、平和秩序を維持してきたかについての主張はあまりなされていないように思われる。

そこで本研究は、近代戦争を中心に戦争の歴史を振り返り、戦争が起こる原因を分析するとともに、現在の国際情勢の中で日本が戦争に突入し、あるいは巻き込まれないようにするために、政府がとるべき政策を考察することを目的とした。尚、本研究では、「どうして人類は戦争を起こしてしまうのか」という普遍的戦争観ではなく、「それまでの戦争と近代戦争（特に第１次世界大戦、第２次世界大戦）の違いは何か、またどうして近代戦争が起こってしまったのか」を研究対象とする。また、本研究は国際政治学の古典的名著から最新の情勢を分析した新書にわたる文献を講読し、検討するという方法をとった。

まず、これまでの戦争の歴史を概観してみる。もちろん戦争は近代、現代になってからいきなり起こったものではない。古代、中世においても戦争は起こっている。しかし近代戦争はそれまでの戦争を凌駕するほどの規模を有する戦争であったことは、犠牲者数、参加国数、戦場の広さを鑑みても明らかである。例えば古代に起こった戦争といえば、最古の和平条約が結ばれたといわれるエジプト、ヒッタイト間のカデシュの戦い、都市国家ギリシアとアケメネス朝ペルシア帝国が戦ったペルシア戦争、ギリシアとスパルタがギリシアポリスの盟主をかけて争ったペロポネソス戦争、そしてハンニバル、スキピオが活躍したことで知られる共和政ローマとフェニキアの植民市カルタゴ間のポエニ戦争などが挙げられる。中世において最も有名な戦争と言えば百年戦争が挙げられる。その他にも、三十

年戦争、ばら戦争、十字軍遠征、日本の例を挙げると、源平が争った治承・寿永の乱、承久の乱、南北朝の動乱、一向一揆などが挙げられる。これらと近代戦争の代表例である、第１次世界大戦、第２次世界大戦を比較してみる。すると、いくつかの違いが見えてくる。

第１に、戦争に参加している主体である。基本的に古代における戦争の主役は、奴隷、もしくは指揮官としての貴族である。戦争参加は名誉だと考えられており、また戦争参加は政治参加につながるため、自分の身分を解放するために、奴隷が重装歩兵となって戦争に参加した。中世における戦争の主役は王家に仕える宮廷貴族、封建所領を治める騎士、そして職業軍人としての傭兵である。基本的に貴族は国王の対外政策方針に従い、諸外国との戦争に参加する。そして、騎士は主君（上位の貴族、国王）との双務的な契約で結ばれ、所領を与えられる代わりに戦争で主君のために戦う。また、傭兵はより高額の給料を払ってくれる王国の軍に参加して戦う。騎士は何人もの主君を持ってもよく、また、傭兵も給料のために戦争に参加するため、当事国への忠誠心が高いとは言えない。中世戦争と近代戦争の間には、エリート出身外交官が主役となり、メンバーズクラブのような会議で決められたルール（勢力均衡など）に則り行われた外交ゲームとしての“戦争”もあった。これに対し、近代戦争は国民戦争とも呼ばれる通り、国民全員が徴兵制による戦争参加あるいは協力を行う総力戦である。したがってナショナリズムが各国で熱狂的になり、戦争に参加する人数も規模も大きく増加した。

第２に、教育の普及と新兵器である。確かに中世においても火砲の登場により、剣による白兵戦があまり意味をなさなくなったのは確かである。しかし、技術的な知識が必要であったため、古代戦争と同様、一部の階級でしか使えなかった。また教育機関も一部の階級（貴族の子弟、武士の子弟など）を対象にしていた。しかし、近代戦争は様々な兵器（戦車、飛行機、暗号通信、銃）が登場した。しかも操作方法を教え込むための教育機関も発達した（例えば日本の国民兵学校）。したがって、これまでの戦争を大きく様変わりさせたといえる。加えて第２次世界大戦中から、巨大な破壊力を持つ核兵器が世界中で製造され、大国は核の抑止力を利用した外交戦略をとれるようになった。

そして何より第１次、第２次世界大戦は名前の通り、世界規模の大戦争であった。大国同士が世界覇権をめぐって争った。確かに古代、中世においても、宗教、イデオロギー上の対立ではなく、政治色の強い覇権戦争は存在した。しかし、それはあくまでも限られた地域での覇権争い（例えばアレクサンドロス大王の東方遠征）や、限られた分野での覇権争い（例えば十字軍遠征は聖地イスラエルにおける宗教上の覇権をめぐっての十字軍とイスラーム勢力の戦争だった）であった。

では、なぜこのような違いが生まれたのか。もちろんこれに対する答えはたくさんあるが、一番大きな理由としては、国民国家の誕生である。民主主義国では、国家権力は国民の信託を仰ぎ、国民の期待に応える必要があるし、たとえ中国、ソ連といった共産主義国のような独裁国家であっても、国民の意向を無視はできない。その結果、“ナショナリズム”（この訳語には民族主義、国民主義、国家主義など様々な言葉があてはめられるが、ひとまず私はこの訳語を“集合的自尊主義”とあてることにする）が各地に起こり、ひとたび国同士の対立が起こると、国民全体で自国を応援しつつ、他国を排斥し（この思想は歴代中国王朝の華夷思想につながる）、戦争へと駆り立てる。だからこそ、近代戦争はこれまでの歴史上類を見ない総力戦、絶対戦争となったと思われる。また、産業革命や科学革命など、歴史を大転換させるイノベーションの存在も大きい。これにより、戦術も大きく変わり、各々の兵器が持つ殺傷能力、威力が格段に上がった。また通信やマスメディアの普及により、“世論”が形成された。世論はナショナリズムの高揚を促進するだけでなく、政治家が国民を無視することを難しくする効能も持った。

それでは、戦争を回避・防止し平和秩序を維持するにはどうすればよいか。その前に、これまで提

唱されてきた国際政治学のパラダイムを表で整理してみる。ここでは、代表的なパラダイムであるリアリズム、リベラリズム、マルクス主義、コンストラクティヴィズムをまとめてみた。

	リアリズム	リベラリズム	マルクス主義	コンストラクティヴィズム
主体	国家	国家 ＋非国家主体	経済的階級	国家 ＋非国家主体
支配的な 人間の欲求	恐怖 支配欲 生き残り	恐怖 快適な生活	強欲	秩序だった意義ある社会生活の必要性
主体の主要目標	全国家はパワーか安全を求める	主体は安全に加えて福利、公正を求める	資本家階級は利益の極大化を図り、労働者階級は公正な賃金と労働環境を求める	主体の利害は相互作用を通じて社会的に構築される
主体の主要手段	軍事力	軍事力 貿易 投資 交渉 説得	富(資本的階級) 労働(労働者階級)	歴史的時期と社会的文脈による
相互作用の支配的プロセス	競争	競争と協力	搾取	歴史的時期と社会的文脈による
国際システム上の支配的な構造上の特徴	ホッブズ的無政府状態	非ホッブズ的無政府状態	経済的不平等	社会的拘束(法、規則、規範、タブー等)

*ジョセフ・S・ナイ・ジュニア/デイヴィッド・A・ウェルチ著『国際紛争―理論と歴史〔原書第 9 版〕』81 頁

国際政治は国内政治とは異なり、強制力を持つ権威が存在しないアナーキーである。しかし捉え方は各パラダイムによって多種多様である。

リアリズムは、各国が自国の生き残りを最大の目的として対外政策、安全保障を進めるというパラダイムである。そして国家の外交に「力（パワー)」と「国益」という概念を導入してこそ平和が得られるのである。モーゲンソーは次のように述べている。「国際政治とは、他のあらゆる政治と同様に、権力闘争である。」（モーゲンソー著『国際政治―権力と平和』〈上〉）またケネス・ウォルツのようなネオリアリストは唯物論的な思考で、理念を力の源泉として認めなかった。ジョセフ・S・ナイ・ジュニア/デイヴィッド・A・ウェルチ著『国際紛争―理論と歴史〔原書第 9 版〕』の第 2 章によると、パワーにも直接かつ命令的な手法で他国に変化を押し付けるハードパワーと、自国が欲することを他国も欲するように仕向けるソフトパワーの 2 種類が存在する。古典的リアリストは両方のパワーの存在を認めるが、ネオリアリストは後者を認めない場合が多い。

リベラリズムは、紛争を抑制する役割を果たすものとしての制度や、民主主義的価値を重視する。制度は、①継続性の感覚をもたらし、②互恵の機会をもたらし、③情報の流通を促し、④紛争解決手段を提供するという 4 つの点で、平和への期待をもたらす。またリベラリズムによると、自由民主主義国同士は、平和的な紛争解決手段を一般原則として共有しているため、戦争をしない（これを民主

的平和“democratic peace”という)。

マルクス主義は、社会主義革命による資本主義の終焉を予測した。しかしこの予測は不正確であった。マルクス主義には、政治を専ら経済に還元した（人々の忠誠心は経済階級にある！）点や、国家が特定の階級（この場合資本家階級）の道具に過ぎないとみなした（外交政策は一部の裕福な資本家の言いなりだ！）点、歴史の進歩に対し硬直した見解を持っていた（資本主義は必ず崩壊し、共産主義が必ず勝つ！）点などにおいて、誤解があった。しかし、富の集中による資本主義の潜在力を指摘し、全体的な格差拡大（今日の国内紛争の主たる原因ともなっていると考えられる）に関心を向けた点は、誤っていなかった。

コンストラクティヴィズムは、主に社会学の影響を受けている。国際政治という「構造」はユニット（国家など）の数、配置だけでなく、共有された言説、理念、行動、規範、規則、適切性の論理、同義などの「間主観的意味」からも構成されている。

このように各パラダイムにはそれぞれ国際社会を分析する様々な「レンズ」を持ち合わせている。もちろん、それぞれレンズを補強するための理論的根拠、背景、具体例や、レンズの傷に当たる弱点、欠陥、反例が存在する。

それでは、日本政府はどのような政策、方針をとればよいか。戦争の歴史、国際政治学の様々な考え方を参考にしながら考察していく。

まず、日本に対し実際に他国が侵略してきた場合、いかに戦争に発展するのを防ぎながら、対処すべきか考える。私は古典的なリアリストに近い考え方でもって対処すべきと考える。近年、北朝鮮の核実験や、ミサイル発射が増え、日本にとって大きな脅威となっているのは周知のとおりである。また、尖閣諸島をめぐる中国との対立は深刻なものと言わざるを得ない。仮に尖閣諸島が中国に実効支配されるのを許してしまうと、日本の安全保障にとって危機的状況になるのは想像に難くない。もちろん、だからといって中国との戦争に突入するのは是が非でも避けなければならない。

現在の日本の安全は、日米同盟に担保されているといっても過言ではない。なぜなら、日本は憲法により交戦権が否定されており、最低限の自衛のみ可能な軍事力（自衛隊）しか有してこなかったからだ。日本は「世界の警察官」アメリカの保護を受けながら、戦後から戦争を一度も起こさず、犠牲者も出していない。

しかし、アメリカの覇権もすでに衰退し始めている。中野剛志著『日本防衛論』によれば、1970年代以降、アメリカの世界における圧倒的な優越が、軍事面でも経済面でも終了したのである。現にドナルド・トランプ次期アメリカ大統領は、アメリカが安全を保障してくれるのだから、対象国はもっと費用を負担するべきであり、負担しなければ撤退すると主張しており、従来のアメリカ外交の典型である、孤立主義（モンロー主義）に逆戻りしそうに思われる。アメリカの政治学者でコンサルティング会社「ユーラシア・グループ」を率いるイアン・ブレマーによると、現在の世界情勢は、圧倒的な覇権国家が存在せず、多極化が進んだ「Gゼロ」の世界である。

これを考慮すると、日本はいつまでもアメリカに軍事面で依存するわけにはいかない。そこで私は最低限自国の領土を守れるほどの軍備を整えるべきであると考える。私が最低限といったのは、安全保障のジレンマを考慮したからである。自国が他国を侵略する意図はないが、相手国との軍事バランスの不均衡を補完するために軍備増強を行った結果、相手国には自国が帝国主義的政策をとっていると脅威を感じてしまい、相手国も軍備増強を行う。これがエスカレートしてしまい、お互いが軍備増強をやめられなくなって不信感が強まり、2 国間の溝が深まることを安全保障のジレンマという。これを防止するためにも、相手国との不断の外交努力を怠らずコミュニケーションをとり、自国への警

戒心を解消させるとともに、相手国へも緊張を生み出すような行為を慎むよう主張すべきである。

次に、周辺国同士が対立を深め、日本がその戦争に巻き込まれないようにすべき方法を考察する。これは主に朝鮮半島の南北の対立を主に想定している。この場合、私は軍事力を行使する前に、外交努力で仲裁に入って戦争を鎮静化させるべきである。何もしないでいると、周辺国同士が戦争に突入し、日本が「とばっちり」を受けることになりかねないからだ。ただ、軍事介入は逆に双方から攻撃対象とされかねない。そうなると逆に日本が戦争に巻き込まれる可能性が高くなる。また松元雅和『平和主義とは何か―戦争哲学で考える戦争と平和』第 6 章で指摘されているように、当事国の同意がない軍事介入は本来国際法違反である。よって私は非軍事介入を推奨する。

最後に 2 点述べておきたいことがある。まず集団的自衛権である。安倍政権は憲法解釈の変更を閣議決定し、安保関連法を成立させて集団的自衛権の行使を容認した。私は別に改憲を行わなくても、集団的自衛権を容認してもよいと考える。他国の侵略に対する個別的自衛権を元来政府は認めてきた。しかし近年紛争が複雑化する中で、自衛と侵略の区別は困難になってきた。たとえ個別的自衛権による自衛を行ったとしても、相手国には“自衛”とは受け取られず、反発してさらに挑発・侵略を行う可能性がある。これに対処するため、「抑止力を高める」という意味で集団的自衛権を行使すれば、相手国が更なる挑発・侵略を起こすリスクを低減することができる。したがって集団的自衛権も容認してもよいと私は考える。ただし過度の拡大解釈による戦争突入を避けるべく、憲法裁判所を設立すべきだと主張する。

次に憲法に明記されている平和主義である。軍備を持つことは、憲法 9 条に違反するという意見は尤もである。しかし私は「日本国憲法の“平和主義”＝武器使用を絶対許可しない絶対平和主義（パシフィズム）」とは考えない。なぜなら何も武器がなかったら、他国の侵略に対して指をくわえて眺めることしかできないからである。また日本国憲法前文には「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。」とある。つまり自国だけ平和であればよいという考えは憲法の精神に反すると考えられる。そのため世界が平和になるという理想のために行動しなければならない。しかし現実世界には紛争が起こっているから、まずはその紛争を止める必要がある。そのためには、平和優先主義（パシフィシズム）の立場をとりつつ、軍備を持って紛争解決にあたるべきである。もちろん私は望んで軍事力行使を行うべきだと主張しているのではない。

今回の研究は主に日本を分析のレンズの焦点として国際政治を分析した。今後は世界全体を俯瞰した研究を行っていきたい。

参考文献

・池上彰『世界から戦争がなくならない本当の理由　戦後 70 年の教訓』祥伝社　2015
・池上彰『日本は本当に戦争する国になるのか？』SB クリエイティブ　2015
・中野剛志『日本防衛論』角川マガジンズ　2013
・中野剛志『世界を戦争に導くグローバリズム』集英社　2014
・辺真一、鳩山由紀夫、高野孟、朴斗鎮『韓国・北朝鮮とどう向き合うか』花伝社　2014
・藤原帰一『「正しい戦争」は本当にあるのか』ロッキング・オン　2003
・ケント・ギルバート、西村幸祐『日本の自立　戦後 70 年、「日米安保法制」に未来はあるのか？』イースト・プレス　2015
・池上彰、佐藤優『新・戦争論　僕らのインテリジェンスの磨き方』文芸春秋　2014

・手嶋龍一、佐藤優『賢者の戦略』新潮社　2014
・手嶋龍一　佐藤優『知の武装：救国のインテリジェンス』新潮社　2013
・金平茂紀、鳩山由紀夫、孫崎亨『「戦争の出来る国」ではなく「世界平和の要の国」へ』
あけび書房　2016
・添谷芳秀『安全保障を問い直す』NHK 出版　2016
・北岡伸一『グローバルプレイヤーとしての日本』エヌティティ出版　2010
・北岡伸一、久保文明『希望の日米同盟―アジア太平洋の海洋安全保障』中央公論新社　2016
・阪田雅裕『政府の憲法解釈』有斐閣　2013
・三浦瑠麗『シビリアンの戦争―デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店　2012
・トゥキュディデス『歴史』〈1〉〈2〉京都大学出版会　2000
・E.H.カー『危機の二十年―理想と現実』岩波文庫　2011
・ジョセフ・S・ナイ・ジュニア、デイヴィッド・A・ウェルチ『国際紛争―理論と歴史〔原書第９版〕』
有斐閣　2015
・モーゲンソー『国際政治―権力と平和』岩波文庫　2013
・石津朋之、永末聡、塚本勝也『戦略原論』日本経済新聞出版社　2010
・ケネス・ウォルツ『人間・国家・戦争：国際政治の３つのイメージ』頸草書房　2013
・マイケル・ウォルツァー『正しい戦争と不正な戦争』風光社　2008
・松元雅和『平和主義とは何か―戦争哲学で考える戦争と平和』中央公論新社　2013
・土山寶男『安全保障の国際政治学―焦りと傲り』有斐閣　2004
・吉川元『国際安全保障論』有斐閣　2007